

特集 テレビ放送60年

I. 特集にあたって

2013年2月1日、日本でテレビ放送が始まって60年を迎えた。テレビ放送の研究開始は戦前にさかのぼる。1926年には高柳健次郎による伝送実験が行われ、欧米各国でテレビ放送の実用化準備が進む中、39年には日本でも実験放送が始まった。しかし、太平洋戦争とともにテレビの研究は中断を余儀なくされ、研究が再開されたのは終戦後の46のことだった。その後も、放送開始までには、標準方式を巡る争いなどさまざまな曲折があり、NHKがテレビの本放送を開始したのは、53年2月1日のことである。同年8月には日本テレビ放送網が民放初のテレビ局として放送を開始した。

誕生までに数多くの波乱があったテレビ放送だが、53年に本放送が始まって以降、日本全国に急速に普及し、激動する日本、そして世界の動きを克明に伝えてきた。人々にとって最も身近なメディアの一つとなったテレビは、報道や娯楽、教養、教育といった幅広い分野で大きな影響力をもたらしてきた。戦後に起きた重要な社会的出来事の多くは、テレビの映像とともに、人々の脳裏に強く焼き付いていると言える。

そして、この間、テレビ自身も大きく変貌を遂げてきた。白黒からカラー、さらにはハイビジョンと、技術の進展とともに画質や音質を大きく向上させてきた。伝送路も時代を追うごとに多様化し、地上波のみだった時代から、ケーブルテレビ、衛星放送（BS・CS）、そして光ファイバーなどの通信設備を利用したIPマルチキャスト放送と広がった。それに伴って多チャンネル化が進み、人々の選択肢は拡大した。

さらに、1990年代後半以降、テレビ放送のデジタル化も急速に進んだ。1996年にCSデジタル放送が開始されて以降、BS放送や地上放送でもデジタルへの転換が進み、12年3月、岩手・宮城・福島の3県で地上アナログ放送が終了したこと、テレビ放送は完全にデジタル化された。日本のテレビ放送は、高画質・高音質で、従来よりも豊富な情報を伝えることができるデジタル化の達成によって、新たな段階に突入したと言える。

一方で、近年、録画機の普及によってタイムシフト視聴が広がるなど、人々のテレビ視聴スタイルは多様化しつつある。さらに、放送と通信の融合によって、オンデマンド型サービスの普及が進み、動画共有サービスを通じた映像の視聴が広が

るなど、映像情報への接し方は刻々と変化している。若い世代を中心とした「テレビ離れ」もしばしば指摘されている。テレビ放送は、デジタル化の達成によって大きく進化したものの、人々の生活スタイルの変化に合わせた、さらなる前進が求められる。放送開始から60年が経過し、テレビの在り方は大きな転換点を迎えている。

本特集ではまず、放送開始から60年を迎えたテレビの歴史を、戦後の主な出来事や放送に関連したデータの移り変わりとともに図表で描き出す。そのうえで、テレビ放送60年に合わせて行われたNHKのさまざまな取り組みを紹介する。テレビ放送60年にあたっては、年末年始から2月にかけて、テレビのこれまでを振り返るとともに、将来を展望する特集番組が編成された。さらに、番組以外でも、インターネットを活用した展開や広報・プロモーション活動、関連イベントなどが行われた。それらの取り組みを以下の7つの項目ごとに整理した。

テレビ60年に合わせた取り組み

1. テレビ60年関連番組
2. NHKアーカイブスの取り組み
3. デジタル展開
4. NHKオンデマンドの取り組み
5. 広報プロモーション展開
6. テレビ60年関連イベント
7. テレビ60年調査

さらに、メディアを取り巻く環境の変化に対応して、現行のハイビジョンの画質を大幅に上回る次世代テレビの開発や、通信との連携によって従来よりも利便性を向上させるサービスの研究が進んでいる。また、NHKに蓄積された放送関連資料をデジタル・アーカイブ化する構想や、これまでの番組を大学教育に活用する動きも現れている。それらを「未来に向けて」と題して紹介する。

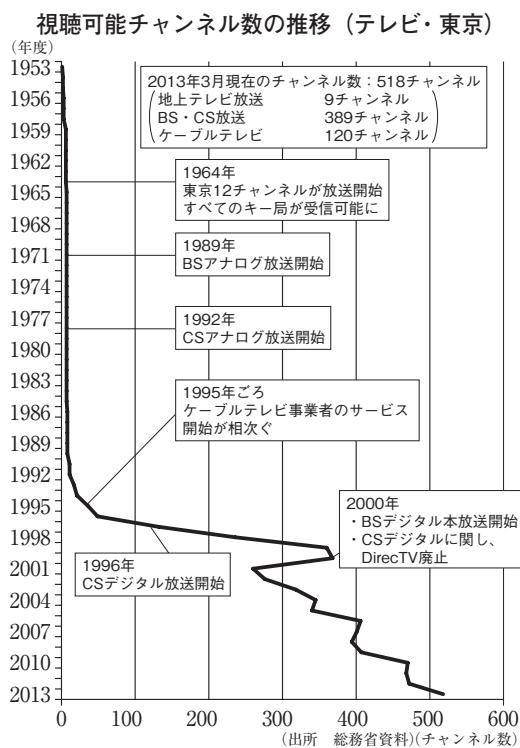
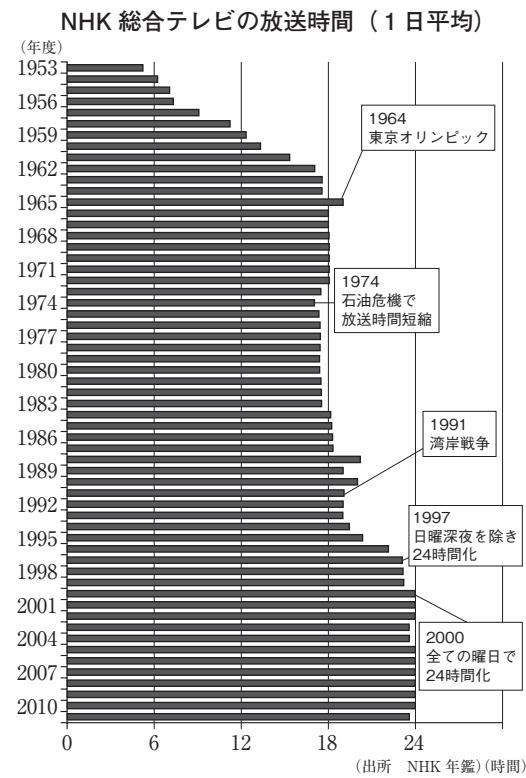
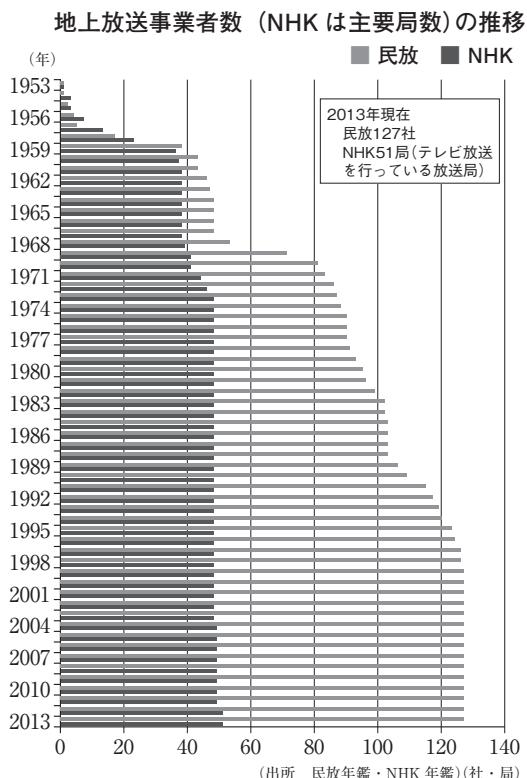
未来に向けて

1. ハイブリッドキャスト
2. スーパーハイビジョン
3. 放送文化アーカイブ構想
4. 番組eテキストシステムの構築

1. 図表・テレビ放送60年の歩み

西暦	昭和／平成	テレビ放送をめぐる動き	社会の動き	放送メディアの変遷							
				地上アナログ	地上デジタル	BSアナログ	BSデジタル	CSSアナログ	CSSデジタル	CATVアナログ	CATVデジタル
1926	1	浜松高工・高柳健次郎がテレビ伝送実験に成功									
1930	5	技術研究所設立 テレビ研究開始									
1939	14	テレビ実験放送開始									
1940	15	初のテレビドラマ実験放送									
1946	21	テレビ研究を再開									
1950	25	電波3法公布	朝鮮戦争始まる								
1951	26	民放開局（中部日本放送、新日本放送）	対日講和条約、日米安保条約調印								
1952	27		対日講和条約発効、「血のメーデー」事件								
1953	28	テレビ本放送開始（NHK・日本テレビ放送網）	「バカヤロー」解散、中国・ソ連から引き揚げ								
1954	29		洞爺丸遭難、第5福丸事件								
1955	30	群馬県伊香保で初のケーブルテレビ誕生	自由民主党発足								
1956	31		日ソ国交回復、日本が国連に加盟								
1957	32		ソ連が人工衛星スプートニク打ち上げ								
1958	33	東京タワー完成	警職法反対闘争								
1959	34	教育テレビ放送開始	伊勢湾台風、皇太子ご結婚								
1960	35	カラーテレビ本放送開始	安保闘争、浅沼社会党委員長刺殺								
1961	36		ガガーリン少佐が人類初の宇宙飛行								
1962	37	テレビ受信契約数 1,000万突破	三河島事故								
1963	38	初の日米間テレビ衛星中継実験に成功	ケネディ米大統領暗殺、吉展ちゃん誘拐事件								
1964	39	東京オリンピックを欧米へ衛星中継	東京オリンピック開催、トンキン湾事件								
1965	40		米が北爆開始、日韓基本条約調印								
1966	41		中国で文化大革命								
1967	42		初の革新都知事								
1968	43		初の心臓移植手術、学園紛争が続発								
1969	44		アポロ11号月面着陸、東大安田講堂攻防戦								
1970	45		大阪万博、よど号ハイジャック事件								
1971	46	総合テレビが全面カラー化	円切り上げ、自衛隊機と全日空機が空中衝突								
1972	47	あさま山荘事件を長時間中継	沖縄返還、日中国交回復、札幌オリンピック								
1973	48		石油ショック、金大氏拉致事件								
1974	49		田中首相金脈問題、小野田少尉が帰国								
1975	50		ベトナム戦争終結、天皇陛下初訪米								
1976	51		ロッキー事件で田中前首相逮捕								
1977	52		日航機ハイジャック事件、青酸コーラ事件								
1978	53	日本初の実験用放送衛星打ち上げ	日中平友好条約調印、成田空港開港								
1979	54		東名日本坂トンネル事故								
1980	55		新宿バス放火事件、静岡駅地下街ガス爆発								
1981	56		北炭夕張炭鉱事故								
1982	57	テレビ音声多重放送本放送開始	フォークリード紛争、日航機羽田沖墜落事故								
1983	58		大韓航空機墜落事件、戸塚ヨットスクール事件								
1984	59	衛星放送の試験放送開始	グリコ・森永事件								
1985	60	緊急警報放送運用開始 文字多重放送開始	日航ジャンボ機墜落								
1986	61		チャルノブイリ原発事故、三原山大噴火								
1987	62		国鉄分割民営化								
1988	63		リクルート疑惑、青函トンネル開業								
1989	1	衛星放送の本放送開始	昭和天皇崩御、ヘルリンの壁崩壊、消費税導入								
1990	2		東西ドイツが統一								
1991	3		湾岸戦争、ソ連崩壊 雲仙・普賢岳で火碎流								
1992	4	CSテレビ放送（アナログ）開始	東京佐川急便事件、天皇陛下が中国初訪問								
1993	5		自民党下野、細川政権発足								
1994	6	ハイビジョン実用化試験放送開始	自社さ連立政権発足、松本サリン事件								
1995	7		阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件								
1996	8	CSデジタル放送開始	O157による食中毒発生、住専処理に公的資金								
1997	9		ペルー日本大使公邸人質事件								
1998	10	NHKワールドTV放送開始	長野オリンピック、利根山毒物カレー事件								
1999	11	NHKワールドTV24時間放送化	東海村で臨界事故、初の脳死移植								
2000	12	BSデジタル本放送開始	三宅島噴火、沖縄サミット開催								
2001	13		米同時多発テロ事件、中央省庁再編								
2002	14	東経110度CSデジタル放送開始	初の日朝首脳会談、サッカーW杯日韓共同開催								
2003	15	東名阪の3大都市圏で地上デジタル放送開始	イラク戦争、有事関連法が成立								
2004	16		拉致被害者家族が帰国、スマトラ島沖で大地震								
2005	17		JR福知山線脱線事故、郵政民営化関連法成立								
2006	18	全都道府県で地上デジタル放送開始	ライブドア事件、福岡の飲酒運転事故で3児死亡								
2007	19	アナログハイビジョン放送（MUSE）終了	新潟県中越地震、大量の年金記録漏れが判明								
2008	20	NHKオンデマンド開始	リーマン・ショック、秋葉原で無差別殺傷事件								
2009	21		衆院選で民主圧勝、鳩山連立政権発足								
2010	22		尖閣沖で中国漁船が巡視船に衝突、「はやぶさ」帰還								
2011	23	地上アナログ放送終了（東北3県除く）	東日本大震災、福島第一原発事故								
2012	24	岩手・宮城・福島で地上アナログ放送終了	自民党が政権復帰								
2013	25	テレビ放送開始60年									

The diagram illustrates the transition of television media over time. It features a vertical timeline from 1926 to 2013. To the right of the timeline, there are four vertical bars representing different media types: Analog TV (black), Digital TV (white), BS (light gray), and CS (dark gray). Arrows indicate the emergence and growth of each medium. The bars for Analog TV and BS appear early, with Analog TV peaking around 1990 and BS appearing around 1992. The bar for Digital TV begins to rise significantly around 2000, reaching its peak around 2010. The bar for CS begins to rise around 2005, reaching its peak around 2010.

**受信料収入・媒体別広告費の推移**

(年)

1950 1953 1956 1959 1962 1965 1968 1971 1974 1977 1980 1983 1986 1989 1992 1995 1998 2001 2004 2007 2010

ラジオ
雑誌
NHK受信料
テレビ
新聞
インターネット

(出所 電通「日本の広告費」・NHK年鑑)(億円)

(注 1) 地上基幹放送については、東京都で受信可能なテレビ放送のチャンネル数
(注 2) 衛星基幹放送及び衛星一般放送については、テレビ放送のチャンネル数の合計
(注 3) ケーブルテレビについては、東京都の主要なケーブルテレビ事業者によって提供されているチャンネル数の平均

(注) NHK受信料収入は年度別データ

9

NHK年鑑'13

2. 視聴率の推移

*ビデオリサーチが調査を開始した1962年12月以降の平均世帯視聴率（関東地区）。

*ビデオリサーチの許諾を得てNHK年鑑編集部で加工編集。

(1) 大河ドラマ、連続テレビ小説、紅白歌合戦

西暦	大河ドラマ (暦年)	平均 視聴率	連続テレビ小説 (年度)	平均 視聴率	紅白 歌合戦	平均 視聴率
1961			娘と私	-		
1962			あしたの風	-	第13回	80.4%
1963	花の生涯	20.2%	あかつき	-	第14回	81.4%
1964	赤穂浪士	31.9%	うず潮	30.2%	第15回	72.0%
1965	太閤記	31.2%	たまゆら	33.6%	第16回	78.1%
1966	源義経	23.5%	おはなはん	45.8%	第17回	74.0%
1967	三姉妹	19.1%	旅路	45.8%	第18回	76.7%
1968	竜馬がゆく	14.5%	あしたこそ	44.9%	第19回	76.9%
1969	天と地と	25.0%	信子とおばあちゃん	37.8%	第20回	69.7%
1970	樅ノ木は残った	21.0%	虹	37.9%	第21回	77.0%
1971	春の坂道	21.7%	繭子ひとり	47.4%	第22回	78.1%
1972	新・平家物語	21.4%	藍より青く	47.3%	第23回	80.6%
1973	国盗り物語	22.4%	北の家族	46.1%	第24回	75.8%
1974	勝海舟	24.2%	鳩子の海	47.2%	第25回	74.8%
1975	元禄太平記	24.7%	水色の時 おはようさん	40.1% 39.6%	第26回	72.0%
1976	風と雲と虹と	24.0%	雲のじゅうたん 火の国に	40.1% 35.0%	第27回	74.6%
1977	花神	19.0%	いちばん星 風見鶏	37.2% 38.3%	第28回	77.0%
1978	黄金の日目	25.9%	おていちゃん わたしは海	43.0% 35.9%	第29回	72.2%
1979	草燃える	26.3%	マーコちゃん 鮎のうた	42.8% 42.7%	第30回	77.0%
1980	獅子の時代	21.0%	なっちゃんの写真館 虹を織る	39.6% 38.5%	第31回	71.1%
1981	おんな太閤記	31.8%	まんさくの花 本日も晴天なり	37.1% 36.6%	第32回	74.9%
1982	咲の群像	23.7%	ハイカラさん よーいドン	36.2% 38.8%	第33回	69.9%
1983	徳川家康	31.2%	おしん (83.4~84.3)	52.6%	第34回	74.2%
1984	山河燃ゆ	21.1%	ロマンス 心はいつもラムネ色	39.0% 40.2%	第35回	78.1%
1985	春の波濤	18.2%	澪つくし いちばん太鼓	44.3% 33.4%	第36回	66.0%
1986	いのち	29.3%	はね駒 都の風	41.7% 39.3%	第37回	59.4%

西暦	大河ドラマ (暦年)	平均 視聴率	連続テレビ小説 (年度)	平均 視聴率	紅白 歌合戦	平均 視聴率
1987	独眼竜政宗	39.7%	チョッちゃん はっさい先生	38.0% 38.1%	第38回	55.2%
1988	武田信玄	39.2%	ノンちゃんの夢 純ちゃんの応援歌	39.1% 38.6%	第39回	53.9%
1989	春日局	32.4%	青春家族 和っこの金メダル	37.8% 33.8%	第40回 1部 2部	38.5% 47.0%
1990	翔ぶが如く	23.2%	凜凛と 京、ふたり	33.9% 35.6%	第41回 1部 2部	30.6% 51.5%
1991	太平記	26.0%	君の名は (91.4~92.4)	29.1%	第42回 1部 2部	34.9% 51.5%
1992	信長	24.6%	おんなは度胸 ひらり	38.5% 36.9%	第43回 1部 2部	40.2% 55.2%
1993	琉球の風(93.1~6)	17.3%	ええによは	35.2%	第44回 1部 2部	42.4% 50.1%
1993	炎立つ(93.7~94.3)	17.7%	かりん	31.4%	第44回 1部 2部	40.1% 51.5%
1994	花の乱(94.4~12)	14.1%	びあの	25.5%	第45回 1部 2部	41.6% 53.9%
1995	八代将軍吉宗	26.4%	春よ、来い (94.10~95.9)	24.7%	第46回 1部 2部	44.9% 50.4%
1996	秀吉	30.5%	走らんか！	20.5%	第47回 1部 2部	41.6% 50.7%
1997	毛利元就	23.4%	ひまわり	25.5%	第48回 1部 2部	40.2% 50.8%
1997			ふたりっ子	29.0%		
1997			あぐり	28.4%		
1997			甘辛ちゃん	26.6%		
1998	徳川慶喜	21.1%	天うらら	27.7%	第49回 1部 2部	45.4% 57.2%
1998			やんちゃくれ	22.5%		
1999	元禄練乱	20.2%	すずらん	26.2%	第50回 1部 2部	45.8% 50.8%
1999			あすか	24.4%		
2000	葵 徳川三代	18.5%	私の青空	24.1%	第51回 1部 2部	39.2% 48.4%
2000			オードリー	20.5%		
2001	北条時宗	18.5%	ちゅらさん	22.2%	第52回 1部 2部	38.1% 48.5%
2001			ほんまもん	22.6%		
2002	利家とまつ・ 加賀百万石物語	22.1%	さくら まんてん	23.3% 20.7%	第53回 1部 2部	37.1% 47.3%
2003	武蔵MUSASHI	16.7%	こころ てるてる家族	21.3% 18.9%	第54回 1部 2部	35.5% 45.9%
2004	新選組！	17.4%	天花	16.2%	第55回 1部 2部	30.8% 39.3%
2004			わかば	17.0%		
2005	義経	19.5%	ファイト	16.7%	第56回 1部 2部	35.4% 42.9%
2005			風のハルカ	17.5%		
2006	功名が辻	20.9%	純情きらり	19.4%	第57回 1部 2部	30.6% 39.8%
2006			芋たこなんきん	16.8%		
2007	風林火山	18.7%	どんどん晴れ	19.4%	第58回 1部 2部	32.8% 39.5%
2007			ちりとてちん	15.9%		
2008	篠姫	24.5%	瞳	15.2%	第59回 1部 2部	35.7% 42.1%
2008			だんだん	16.2%		
2009	天地人	21.2%	つばさ	13.8%	第60回 1部 2部	37.1% 40.8%
2009			ウェルかめ	13.5%		
2010	龍馬伝	18.7%	ゲゲゲの女房	18.6%	第61回 1部 2部	35.7% 41.7%
2010			てっぱん	17.2%		
2011	江・姫たちの戦国	17.7%	おひさま	18.8%	第62回 1部 2部	35.2% 41.6%
2011			カーネーション	19.1%		
2012	平清盛	12.0%	梅ちゃん先生	20.7%	第63回 1部 2部	33.2% 42.5%
2012			純と愛	17.1%		

(注) 紅白歌合戦の1989年以降の放送は2番組に分かれているため、便宜上1部・2部と表記。

(2) 全局高世帯視聴率番組50

No	番組名	放送日（曜日）	放送開始時刻	放送分數	局名	平均視聴率
1	第14回NHK紅白歌合戦	1963年12月31日(火)	21:05	160	NHK総合	81.4%
2	東京オリンピック（女子バレー決勝・日本×ソ連はか）	1964年10月23日(金)	19:20	220	NHK総合	66.8%
3	2002FIFAワールドカップ™(日本×ロシア)	2002年6月9日(日)	20:00	174	フジテレビ	66.1%
4	プロレス（WWA世界選手権・デストロイア×力道山）	1963年5月24日(金)	20:00	75	日本テレビ	64.0%
5	世界パンタム級タイトルマッチ（ファイティング原田×エデル・ジョフレ）	1966年5月31日(火)	20:00	86	フジテレビ	63.7%
6	おしん	1983年11月12日(土)	8:15	15	NHK総合	62.9%
7	ワールドカップサッカーフランス'98（日本×クロアチア）	1998年6月20日(土)	21:22	128	NHK総合	60.9%
8	世界パンタム級タイトルマッチ（ファイティング原田×アラン・ラドキン）	1965年11月30日(火)	20:00	86	フジテレビ	60.4%
9	ついに帰らなかった吉展ちゃん	1965年7月5日(月)	7:35	25	NHK総合	59.0%
10	第20回オリンピックミュンヘン大会	1972年9月8日(金)	7:21	51	NHK総合	58.7%
11	ゆく年くる年	1963年12月31日(火)	23:45	15	NHK総合	57.4%
12	2010FIFAワールドカップ™(日本×パラグアイ)	2010年6月29日(火)	22:40	150	TBS	57.3%
13	世界パンタム級タイトルマッチ（ファイティング原田×ペルナルド・カラバロ）	1967年7月4日(火)	20:00	86	フジテレビ	57.0%
14	旅路	1968年3月9日(土)	8:15	15	NHK総合	56.9%
15	ザ・ビートルズ日本公演	1966年7月1日(金)	21:00	60	日本テレビ	56.5%
16	おはなはん	1966年9月19日(月)	8:15	15	NHK総合	56.4%
17	ありがとう	1972年12月21日(木)	20:00	55	TBS	56.3%
18	あしたこそ	1969年1月31日(金)	8:15	15	NHK総合	55.5%
19	ボリショイサーカス中継	1963年7月16日(火)	19:30	45	NHK総合	55.3%
19	澪つくし・最終回	1985年10月5日(土)	8:15	15	NHK総合	55.3%
21	繭子ひとり	1972年2月10日(木)	8:15	15	NHK総合	55.2%
22	世界パンタム級タイトルマッチ（ファイティング原田×エデル・ジョフレ）	1965年5月18日(火)	20:00	86	フジテレビ	54.9%
23	世界パンタム級タイトルマッチ（ファイティング原田×ジョー・メデル）	1967年1月3日(火)	20:00	86	フジテレビ	53.9%
24	ニュース（吉展ちゃん事件）	1965年7月5日(月)	8:00	15	NHK総合	53.6%

(ビデオリサーチホームページより転載)

No	番組名	放送日（曜日）	放送開始時刻	放送分數	局名	平均視聴率
25	世界パンタム級タイトルマッチ（ファイティング原田×ローズ）	1968年2月27日(火)	20:00	86	フジテレビ	53.4%
26	藍より青く	1972年9月8日(金)	8:15	15	NHK総合	53.3%
26	鳩子の海	1975年3月22日(土)	8:15	15	NHK総合	53.3%
28	第11回冬季オリンピック札幌大会	1972年2月11日(金)	9:30	180	NHK総合	53.1%
29	赤穂浪士	1964年11月29日(日)	21:30	45	NHK総合	53.0%
30	サッカー・2006FIFAワールドカップ™ 日本×クロアチア	2006年6月18日(日)	21:35	175	テレビ朝日	52.7%
31	大相撲初場所・千秋楽（千代の富士初優勝）	1981年1月25日(日)	16:37	83	NHK総合	52.2%
32	宇宙中継・オリンピックメキシコ大会	1968年10月25日(金)	7:20	60	NHK総合	51.8%
32	北の家族	1974年3月1日(金)	8:15	15	NHK総合	51.8%
34	プロレスリング（WWA世界選手権・豊登×デストロイア）	1965年2月26日(金)	20:00	76	日本テレビ	51.2%
35	ニュース（連合赤軍・あさま山庄事件）	1972年2月28日(月)	9:40	640	NHK総合	50.8%
35	第19回輝くレコード大賞	1977年12月31日(土)	19:00	115	TBS	50.8%
35	第60回全国高校野球選手権大会・閉会式	1978年8月20日(日)	14:20	65	NHK総合	50.8%
38	世界フライ級王座決定戦（ホランショ・アカバロ×高山勝義）	1966年3月1日(火)	20:00	86	フジテレビ	50.7%
39	ベン・ケーシー	1963年1月11日(金)	21:30	60	TBS	50.6%
39	田中總理中国へ	1972年9月25日(月)	7:35	55	NHK総合	50.6%
39	大相撲春場所・千秋楽（貴ノ花初優勝）	1975年3月23日(日)	17:03	57	NHK総合	50.6%
39	ノンちゃんの夢	1988年9月24日(土)	8:15	15	NHK総合	50.6%
43	8時だヨ！全員集合	1973年4月7日(土)	20:00	55	TBS	50.5%
44	おていちゃん	1978年9月11日(月)	8:15	15	NHK総合	50.0%
44	ニュース・天気予報（台風18号関連）	1982年9月12日(日)	19:00	20	NHK総合	50.0%
44	もうひとりのおしん	1983年8月17日(水)	8:15	15	NHK総合	50.0%
47	マーちゃん	1979年9月25日(火)	8:15	15	NHK総合	49.9%
48	ゆびきり	1973年1月25日(木)	20:00	55	TBS	49.8%
49	はね駒	1986年8月30日(土)	8:15	15	NHK総合	49.7%
50	武田信玄	1988年2月14日(日)	20:00	45	NHK総合	49.2%

(注1) オリンピック・ワールドカップサッカー・大相撲・高校野球などは、大会・場所ごとに、最高のもの1番組をそれぞれ抽出。

(注2) 紅白歌合戦・レコード大賞は最高のもの1番組をそれぞれ抽出。

(注3) 15分以上の番組を対象としている。

3. 基礎データ

西暦	昭和／平成	NHKテレビ局数（地上波主要局）	民放テレビ事業者数推移（地上テレビ）	NHK総合テレビ・1日当たり放送時間（東京・年度別）	NHK受信料収入（億円・年度別）	媒体別広告費（億円）				
						新聞	雑誌	ラジオ	テレビ	インターネット
1953	28	1	1	5:22	65	320	25	45	1	
1954	29	3	1	6:23	95	322	30	74	4	
1955	30	3	2	7:06	103	337	35	98	9	
1956	31	7	4	7:31	115	405	40	130	20	
1957	32	13	5	9:08	134	510	50	150	60	
1958	33	23	17	11:23	163	525	55	157	105	
1959	34	36	38	12:34	247	618	80	162	238	
1960	35	37	43	13:33	320	684	100	178	388	
1961	36	38	43	15:34	403	824	125	178	539	
1962	37	38	46	17:07	497	922	144	173	690	
1963	38	38	47	17:58	592	1120	169	171	899	
1964	39	38	48	17:57	654	1297	195	170	1081	
1965	40	38	48	19:03	700	1233	192	161	1110	
1966	41	38	48	18:01	737	1337	211	169	1247	
1967	42	38	48	18:01	772	1611	255	195	1509	
1968	43	39	53	18:06	777	1884	298	233	1745	
1969	44	41	71	18:07	834	2250	348	291	2042	
1970	45	41	81	18:07	905	2653	418	345	2445	
1971	46	44	83	18:07	990	2681	445	388	2594	
1972	47	46	86	18:07	1079	3024	478	428	2841	
1973	48	48	87	17:49	1160	3721	572	496	3522	
1974	49	48	88	17:05	1224	3945	626	554	3917	
1975	50	48	90	17:36	1283	4092	670	602	4208	
1976	51	48	90	17:44	1875	4550	797	704	5093	
1977	52	48	90	17:46	2036	5068	877	811	5847	
1978	53	48	91	17:44	2084	5702	951	908	6535	
1979	54	48	93	17:40	2134	6554	1119	1061	7508	
1980	55	48	95	17:41	2638	7086	1281	1169	7883	
1981	56	48	96	17:50	2730	7572	1450	1264	8389	
1982	57	48	99	17:53	2795	7933	1565	1330	9055	
1983	58	48	102	17:54	2839	8369	1739	1425	9620	
1984	59	48	102	18:17	3229	8468	1857	1501	10307	
1985	60	48	103	18:24	3272	8887	2230	1612	10633	
1986	61	48	103	18:30	3315	9145	2382	1633	10908	
1987	62	48	103	18:33	3364	9882	2577	1727	11745	
1988	63	48	103	20:21	3412	11267	2962	1879	13161	
1989	1	48	106	19:03	3618	12725	3354	2084	14627	
1990	2	48	109	20:02	4656	13592	3741	2335	16046	
1991	3	48	115	19:09	4989	13445	3866	2406	16793	
1992	4	48	117	19:03	5154	12172	3692	2350	16526	
1993	5	48	119	19:01	5321	11087	3417	2113	15891	
1994	6	48	120	19:46	5435	11211	3473	2029	16435	
1995	7	48	123	20:37	5541	11657	3743	2082	17553	
1996	8	48	124	22:15	5714	12379	4073	2181	19162	16
1997	9	48	126	23:11	5946	12636	4395	2247	20079	60
1998	10	48	126	23:16	6071	11787	4258	2153	19505	114
1999	11	48	127	23:21	6177	11535	4183	2043	19121	241
2000	12	48	127	24:00	6265	12474	4369	2071	20793	590
2001	13	48	127	24:00	6362	12027	4180	1998	20681	735
2002	14	48	127	24:00	6425	10707	4051	1837	19351	845
2003	15	48	127	23:58	6478	10500	4035	1807	19480	1183
2004	16	49	127	23:59	6410	10559	3970	1795	20436	1814
2005	17	49	127	24:00	6024	10377	4842	1778	20411	3777
2006	18	49	127	24:00	6138	9986	4777	1744	20161	4826
2007	19	49	127	24:00	6312	9462	4585	1671	19981	6003
2008	20	49	127	24:00	6386	8276	4078	1549	19092	6983
2009	21	49	127	24:00	6442	6739	3034	1370	17139	7069
2010	22	49	127	24:00	6598	6396	2733	1299	17321	7747
2011	23	49	127	※ 23:55	6725	5990	2542	1247	17237	8062
2012	24	51	127	23:53	※ 6387	6242	2551	1246	17757	8680
出典		NHK年鑑	民放年鑑	NHK年鑑	NHK年鑑	電通「日本の広告費」				

※2011年度以降は
デジタル放送（他
税抜きの金額
はアナログ放送）

II. テレビ60年に合わせた取り組み

1. テレビ60年関連番組

(1) 概要

2013年2月1日、日本でテレビ放送が始まってからちょうど60年の節目に合わせて、NHKでは関連番組を多彩に編成したほか、デジタル、プロモーション、イベントなどを併せて展開し、視聴者とともに歩んできたテレビの60年を振り返るとともに、これからのテレビの可能性について考える機会と位置づけた。

(2) 年末年始から関連番組をスタート

テレビ60年の関連番組は12年の年末から放送を開始した。12月30日には『NHKアーカイブス テレビ60年（1）わくわくドキドキ！アニメ＆少年ドラマ』、31日は『NHKアーカイブス テレビ60年（2）鈴木健二さんと語る懐かしの名番組』を放送した。13年元日の大型中継番組『2013新春！テレビが見つめたニッポンの正月60年』では、東京五輪からロンドン五輪までのオリンピック放送の歴史や、東京タワー開業からスカイツリーのオープンまで、テレビが伝えてきた60年を、年始を迎えた全国各地からの中継を交えながら楽しく紹介した。番組は、ここ数年の元日午前の番組の中では最も高い視聴率を記録した（前半7.7%、後半8.7%）。また3日夜には、『新春TV放談 2013』の中で、“テレビ60年 人気ランキング”や、“テレビを変えたのはこの人だ”ランキングを発表、大ヒット番組が生まれる秘密に迫った。テリー伊藤や秋元康、鈴木おさむなど昔から今に至るまでテレビのヒット番組に関わってきた人たちの熱意が視聴者に伝わり、大きな反響を呼んだ。

BSプレミアムではかつて最高視聴率を記録し、10年前にも総集編が高視聴率を獲得した『連続テレビ小説』「おしん」の総集編を1月1日から3日連続で編成した。あわせて、総合テレビでも、5日夜間に『テレビ60年 連続テレビ小説“あなたの朝ドラって何！”』を放送し、今も変わらぬ朝のお茶の間の中心に位置し続ける「朝ドラ」の軌跡を伝えた。またBS1では東京オリンピック・女子バレーボール決勝で「東洋の魔女」がソ連チームを打ち破った試合の全記録映像を発掘・放送するなど、各波で「2013年はテレビ60年」というメッセージをアピールした。

(3) NHKアーカイブスサイトのリニューアル

NHKアーカイブスのポータルサイトをテレビ60年に合わせて大幅にリニューアルした。テレビ60年史を刻む代表的なNHK番組・ニュース約1,800本を「テレビ60年・特選コレクション」として詳しく紹介。あわせて、NHKが保管する70万本以上のアーカイブス番組の大部分の番組情報（あらすじ・出演者等）、および、テレビ放送開始からの2万日を超える毎日の放送番組表をすべて検索できるようにした。

また、制作関係者や出演者に取材したテレビ史秘話など、およそ200本の特集テーマ記事の掲載や、自分のお気に入りの番組をコレクションして思い出や感想を書き込み、他の視聴者と共有できるソーシャルネットワーク機能、楽しいクイズに答えて懐かしい番組キャラクターのペーパークラフトなどをダウンロードできるページを用意した。パソコン版は1月15日から、スマホ・タブレット・データオンライン版は2月1日から公開。

アクセス数はテレビ60年特集番組が多く放送された1月30日～2月2日の間、ニュース、番組表に次ぐNHKオンライン第3位となるなど、極めて好調に推移している。特にNHKオンラインマント

(NOD) の特選ライブラリーについては、NOD上の9割以上の番組にリンクをした結果、NHKアーカイブスのサイトからのクリック数は、NHKオンライントップページをしのいで1位となつた。



図1 NHKアーカイブスのポータルサイト

(4) 「テレビ60年記念ドラマ～メイドインジャパン～」

総合テレビでは、1月26日から3週にわたるシ

リーズで、『テレビ60年記念ドラマ～メイドインジャパン』を放送した。

日本が戦後よりどころとしてきた「ものづくり」の在り方、これからの中中国をはじめとする国際社会との向き合い方を、改めて問いかける重厚な内容だった。

番組HPの掲示板にも、「本作は現実を直視し、背景をあぶり出し、恐ろしいほどにリアルでよかったです」「少しだけ暖かい気持ちになりました」「大塚寧々さんと妻がオーバーラップしていました」「戦後の企業戦士二世である我々世代は管理職である今、力の発揮どころかもしれない」など、視聴者からさまざまな意見が寄せられ、“メイドインジャパン”に対する深い思い入れが語られた。こうした多くの視聴者からの支持を得て、視聴率は、第1回9.7%、第2回10.7%、第3回8.8%と健闘した。



図2 『テレビ60年記念ドラマ～メイドインジャパン』

(5) テレビ放送が始まった2月1日の特番編成

記念日となる2月1日（金）の夜間には、総合テレビとBS1で分厚い特集を編成し、デジタル展開と合わせて視聴者にテレビ60年を強力にアピールした。

①午後7:30～『テレビのチカラ あの人気が選ぶ“忘れられない名番組』

歴史的な名番組をアーカイブス映像で振り返りながら、北島三郎や萩本欽一などのベテランから女子サッカーの澤穂希まで各世代がテレビの思い出やこれからのテレビを語った。

また黒柳徹子が自分自身と語る“ふたり徹子”や、鈴木福と久保田祐佳アナのニュース7探検、永六輔と秋元康の対談など、家族で楽しめる企画も設けた。世帯視聴率は、10.9%だった。



図3 『テレビのチカラ あの人気が選ぶ“忘れられない名番組』

②午後10:00～『1000人が考える テレビ ミライ』

「ハード論ではなくソフト論でテレビの未来を語る」というコンセプトのもと、1,000人の視聴者から、今のテレビ番組への要望を頂き、それに對し、糸井重里を司会に、これまで日本のテレビ界を引っ張ってきた民放の番組制作者や、インターネット関係者、NHKからは柳澤秀夫解説委員が出演し、テレビがどう変われば、視聴者の期待に応えられるのか徹底的に議論を展開した。



図4 『1000人が考える テレビ ミライ』

③深夜0:58～3:00 『NHK×日テレ 60番勝負』

（翌3日午前0:50～1:20には日本テレビから『日テレ×NHK 60番勝負』を放送）

60年前、テレビ放送を開始した2つの放送局、NHKと日本テレビがコラボレーションし特集番組を編成した。秘蔵のアーカイブス映像をテーマごとに見せたり、若手ディレクターが両局の名物番組に交換留学し、それぞれの局の良さを体感するといったコーナーを対決スタイルで構成した。判定はテレビの前の視聴者がテレビのリモコンやスマホによる「イイ」ボタンの連打で決める演出とした。NHKのコンテンツは、制作力の高さを改めて印象づけ、番組には、若い層からの反響も含め、多くの手ごたえがあった（深夜にもかかわらず、全国の視聴者センターには200件を超える

反響)。



図5 『NHK×日テレ 60番勝負』

④デジタル展開

『NHK×日テレ 60番勝負』では、両局のデジタルチームが連携し、新しい視聴体験を提供する狙いでデジタル展開を図った。共同開発した視聴者参加システムでは、データ放送とスマートフォン（パソコンを含む）で2夜ともに全放送時間中に視聴者からの「イイ」投票を受け付け、両局の勝敗の決め手として効果的に活用した。

「イイ」と連打するシンプルな仕組みが視聴者に受け入れられ、総計で1,976万8,656イイ投票が得られるなど、双方向番組としてはこれまでにない大きい反響があった。またNHKと日テレのイイ対決では、2夜総計でNHK 570万5,739イイ、日テレ506万1,740イイを獲得した。

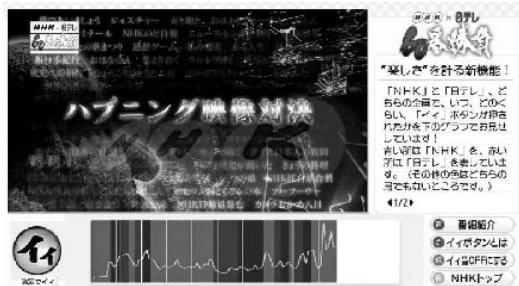


図6 「イイ」投票のデータ放送画面

(6) 子ども番組で60年を振り返ったEテレ

『ざわざわ森のがんこちゃんスペシャルショー～プリンプリンと大ぼうけん』（2月11日（月）午前9:00～9:45）

放送17年目を迎える人気人形劇「ざわざわ森のがんこちゃん」の公開収録に、TV60年企画を大胆に取り入れ、NHKで放送した歴代の人形と豊富なアーカイブ映像を紹介し、Eテレならではのテレビ60年企画として親子に楽しんでいただきたい。

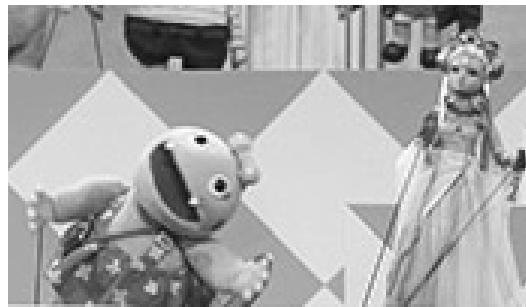


図7 『ざわざわ森のがんこちゃんスペシャルショー～プリンプリンと大ぼうけん』

(7) BS1はスポーツの歩みとテレビを特集

BS1では「テレビが映したスポーツ60年」を、1月から始まった全6回の月1回のシリーズと、2月1日の特集とを並行して展開した。

2月1日は『特集 テレビが映したスポーツ60年』を、「第1部 お茶の間にスポーツがやってきた（後9:00～9:50）」、「第2部 野球！野球！野球！（後11:00～11:50）」、「第3部 舞台は世界へ（翌2日午前0:00～0:50）」の3部構成で編成。

テレビれい明期の力道山、柄若、東京五輪から、プロ野球ONの時代、そして五輪やサッカーW杯を中心に世界で活躍したアスリートたちを、貴重なアーカイブ映像で紹介した。

2. NHKアーカイブスの取り組み

NHK知財展開センターでは、NHKのテレビ放送の歴史をふかん的、体系的に理解してもらうためにNHKアーカイブスのポータルサイトを一新した（13年1月15日公開）。「TV60年・特選コレクション」と題し、NHKの代表的な番組・ニュースを短い動画で閲覧できること、検索機能を充実させ視聴者一人一人がそれぞれの方法で分かりやすくコンテンツにアプローチできることを目指した。NHKのインターネット事業の中では経営広報の一環と位置づけ、NHKが持つ膨大なコンテンツの「ショーウィンドー」として機能すること等を目標とした。

(1) 番組・ニュースを短い動画で閲覧

テレビ放送60年の歴史の中から約1,800項目の番組・ニュースを厳選し、番組の概要や主な出演者、放送期間などのデータを付したページを作成した。ニュース約400本、番組約400本について、短い動画クリップを作成し、閲覧を可能にした。番組のうちNOD特選ライブラリーにある約500本はNODの試聴用動画へのリンクを設けて短い動画の試聴を可能にした。



図8 新NHKアーカイブスポータル トップ画面

(2) 多彩な検索機能・利用者サービス

多数のコンテンツを利用者なりの視点で検索してもらうために7種類の検索方法を設けた。

- ①放送年から探す（1953～2012年）
- ②ジャンルから探す
(大河ドラマ、特集番組など15ジャンル)
- ③地域から探す（各都道府県、海外）
- ④特集テーマから探す
(出演者や関係者へのインタビュー等)
- ⑤ランキングから探す
(サイト内の閲覧件数など)
- ⑥イメージから探す（図8）
(技研が開発した「En-Vision」を用い、ジャンルやキーワードで共通項を持つ番組やニュースを一度に50件まで表示できる)
- ⑦キーワードで探す
(番組名や出演者名などで自由に検索)

このほか、NHKアーカイブスの番組記録を検索できる「NHKクロニクル」、放送開始から60年間の中で任意の日の番組表を検索できる「番組タイムマシーン」など、NHKが保存するコンテンツを検索できる機能を備えた。

また、NHKネットクラブからの登録・認証によって「マイページ」を作成することができる機能を設けた。技研が開発したソーシャル・ネットワーク機能「Teleda」を活用し、利用者の年齢に応じた“年表”やお気に入りの番組を集めた“本棚”が作れるなど、利用者一人一人に応じた楽しみ方ができる工夫を施した。



図9 検索結果画面

(3) 多面的なデバイス・イベント展開

パソコン版を公開後、スマートフォン対応、タブレット対応版も公開、幅広いデバイスからのアクセスを可能にした。また検索システムや閲覧用動画を活用しデータオンラインにも展開、さらに13年度にハイブリッドキャストにも展開する予定である。

またNHKイベントで利用できるツールとして、サイトで閲覧できる番組・ニュースの写真に、スマートフォンから動画ページにアクセスするためのQRコードを付した大型パネルを制作した。約550本の番組・ニュースについて、パネルを見ながらスマートフォンで動画を見る能够性があるので、NHK各放送局やイベント会場など約30か所での展示を行った。

(4) 反響

アーカイブスポートアルサイトへのアクセスは、3月末の時点で公開以来の総計が1,049万PV（ページビュー）に達した。テレビ60年関連特集番組との連動や、プレマップなどの広報番組、民間の大手ポータルサイト上での特集ページ作成といった幅広いプロモーションが効果をもたらし、多くのアクセスにつながったと考えられる。

(5) NHKコンテンツのショーウィンドー効果

NHKアーカイブスが保管するコンテンツは、受信料によって制作された放送資産として視聴者への還元だけでなく、NHKグループ全体での事業展開のシーズ（種）としての期待が高まっている。

る。

新アーカイブスポートサイトでは、番組やニュースに関わる情報を提供しながら2次展開が図られているコンテンツの情報へのリンクを充実させた。NOD特選ライブラリーの試聴用動画を見ていただくことで、NODのサイトでNHKコンテンツに触れる機会を増やすことにつながった。また、DVDや書籍など関連商品情報へのリンクも設けた。

テレビ60年の歴史の中で蓄積されてきたNHKコンテンツへの期待、関心の高さを強く感じさせるとともに、インターネットを通じてアーカイブスが保管・蓄積してきたコンテンツを還元・展開するための「ショーウィンドー」としての役割・効果が期待されている。

3. デジタル展開

13年2月1日を中心に、デジタル展開として大きく次の3つの事業を行った。

- ①インターネット上の「テレビ60年アーカイブスポートサイト」展開
- ②データ放送での「@NHK_PR がデータ放送に登場！」展開
- ③コラボ番組「NHK×日テレ 60番勝負」の「イイボタン」展開

①の「テレビ60年アーカイブスポートサイト」については前節に譲り、ここでは②と③について記述する。

(1) 「@NHK_PR がデータ放送に登場！」展開

NHK_PRは、フォロワー数が50万を超えるNHK広報局のツイッターアカウントである。テレビ放送60年を記念してデータ放送とツイッターの人気アカウントのコラボレーションを行い、テレビとインターネットを接続する運動を進めるとともに、データ放送の認知度向上を図った。

2月1日の総合テレビ午前8時15分からの『あさイチ』、午後7時30分からの『テレビのチカラ』、午後10時からの『1000人が考えるテレビ ミライ』で連動データ放送を実施した。広報局のNHK_PRアカウント担当者がツイッターとデータ放送に向け投稿を行い、それに対するツイッター上の視聴者からの「#tv60」のハッシュタグ付きのツイートや、「テレビ放送60年」サイト上に設けたメールフォームから寄せられた投稿を広報局担当者が選択しデータ放送画面上で紹介した。



図10 「@NHK_PR がデータ放送に登場！」

ツイッターおよびメール投稿は、3番組合わせて1万6,614件寄せられ、そのうちの2,412件をデータ放送画面上で紹介した。

(2) コラボ番組「NHK×日テレ 60番勝負」の「イイボタン」展開

13年2月2日（土）、3日（日）にテレビ放送60年を記念したNHKと日本テレビ放送網株式会社（日テレ）とのコラボレーション番組を生放送した。その番組に連動するデータ放送およびスマートフォンを中心とするインターネットコンテンツの展開を行った。

デジタル展開の内容については、番組内容と歩調を合わせて検討した。番組に対する視聴者のリアクションをデータ放送とインターネットを用いてリアルタイムに番組に反映することを中心に展開することになり、データ放送およびインターネットからの投票・集計システムの設計・開発を行った。これは、テレビのリモコンの決定キーで「イイボタン」を何度も押した視聴者の動向を、あるいはスマートフォン等で番組ページにアクセスした際に表示される「イイボタン」を何度も押した視聴者の動向を10秒程度のタイムラグで番組内で集計図示するものである。

デジタル展開では、1日目のNHK放送の番組でも2日目の日テレ放送の番組でも、同一のホームページや集計システムを使うため、事前に責任と費用分担の範囲を定めておいた。

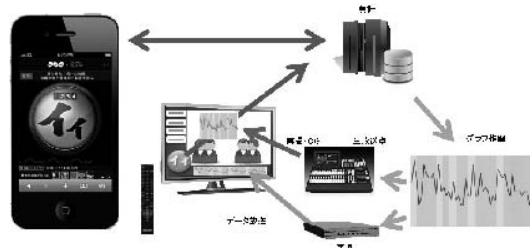


図11 「イイボタン」の概要

「イイボタン」が押された数は、1日目のNHKでの放送では807万4,119回、2日目の日テレの放送では1,169万4,537回だった。

4. NHKオンデマンドの取り組み

見逃し番組では、『1000人が考える テレビミライ』、『テレビ60年記念ドラマ～メイドインジャパン』を配信した。また、特選ライブブラーーでは、『大河ドラマ』『独眼竜政宗』を記念に配信開始した。『おしん』については、BSプレミアムでの再放送の効果により、特選ライブブラーーの視聴も大きく伸びた。

テレビ60年・アーカイブスポートアルとの連携では、特選ライブブラーーの9割以上の番組とリンクをした結果、アーカイブスポートアルからのクリック数は1位、訪問者数2位と大きな誘導につながった。



図12 新NHKアーカイブスポートアルとの連携

2月1日のイベントについても、特選ライブブラーーを中心に紹介した展示ブースを設置し、来場者にNHKオンデマンドのお試しカードを配布した。

5. 広報プロモーション展開

(1) キャッチコピー、ロゴの制作

NHKのテレビ60年について、統一感をもって視聴者に広く周知するために、下記のキャッチコピー、ロゴを作成、オンエア、オフエアによる広報展開や関連番組などで共通に使用することでテレビ60年の浸透を図った。



図13 テレビ60年のキャッチコピー・ロゴ

またNHKの人気キャラクター「どーもくん」が、60年をイメージしたメガネをかけ、「TV」と「+」を加えた「TV60年どーもくん」として、60年のロゴと同様、さまざまな広報展開を図った。



図14 「TV60年どーもくん」

(2) オンエア展開

『とっておきサンデー』では、12月16日放送分で、テレビ60年全体の概要と意義について紹介。さらに1月27日には、日テレとのコラボなど2月1日の特番や、アーカイブスポートアルサイトなどをPRした。さらに『土曜スタジオパーク』でも1月19日には日テレとの共同記者会見のもようを伝えたほか、2月2日には『メイドインジャパン』の國村隼をゲストに迎えた。

このほか、『もうすぐ9時テレマップ』『知ってる?デジタル』などの定時番組をはじめ、NHKプレマップでも2月1日の特番やアーカイブスポートアルサイトなどTV60年関連の番組やサイトを視聴者に分かりやすく紹介した。

さらに、テレビ60年を幅広く周知し、視聴者とともにテレビを考えるために多彩なミニ番組を編成した。古いブラウン管の頭部を持つ怪人が登場し、テレビの歴史を楽しく紹介するミニドラマ『ブラウン・カーン』(1分×10本)、60年後のテレビ放送をユーモアたっぷりに描く『ミライテレビ60』(1分×5本)等を集中編成した。

(3) オフェアプロモーション

プロモーションは特集番組を集中編成した2月1日(金)に向けて展開した。12月の放送総局長会見での外部発表を皮切りに、1月中旬から渋谷や新宿、品川といった主要ターミナル駅のポスター掲出やサイネージでのPRを展開した。さらに2夜にわたって編成した日テレとのコラボ番組『NHK×日テレ 60番勝負』については、1月15日にNHK放送博物館で中居正広や両局のアナウンサー列席のもと、共同記者会見を行った。



図15 渋谷駅前でのプロモーション

6. テレビ60年関連イベント

テレビ放送60年を記念して、これまでのテレビ放送の歩みを振り返りながら、視聴者に感謝し、これからの中のテレビの未来の姿を紹介するイベントとして、「テレビ60年感謝祭～これまでも、これからも～」を、放送開始の2月1日をはさむ9日間、記念番組と連動する形で実施した。

(1) イベントの概要

- ・会期：13年1月26日～2月3日
- ・会場：NHK放送センター4階正面玄関、スタジオパーク、ふれあいホール
- ・入場者数 3万210人

(2) 主な内容

- ①あの日に帰ろう！～テレビ60年を振り返る～
 - ・「放送機材の歴史」（カメラ、マイク、テレビなど）
 - ・昔のどの自慢スタジオ再現（体験）
 - ・テレビカメラがとらえた日本の60年（ニュース映像）
 - ・スポーツの60年（映像）
 - ・なつかしの大河ドラマ（パネル）
 - ・思い出の朝の連続テレビ小説（パネル）
 - ・『ひょっこりひょうたん島』人形展示
 - ・『にこにこぶん』着ぐるみ展示 ほか



図16 テレビ機材の歴史を新旧比較で展示

②輝くテレビのあした～テレビができるあんなことこんなこと～

- ・スーパーハイビジョンシアター（ロンドン五輪映像上映）
- ・ハイブリッドキャスト（デモ展示）
- ・NHKアーカイブスポートサイト（ネット実演）
- ・NHKオンデマンド（ネット実演）

③ステージイベント

- ・『大河ドラマ～八重の桜』トークショー（1月26日）
 - 出演：榎木孝明ほか
- ・『NHK紅白歌合戦』トークショー（1月27日）
 - 出演：北島三郎ほか
- ・『テレビ60年記念ドラマ～メイドインジャパン』トークショー（2月2日）
 - 出演：國村隼ほか
- ・テレビが伝えたスポーツ60年（2月3日）
 - 出演：山本浩、工藤三郎、刈屋富士雄
- ・なつかしのテレビ番組名作選（随時）

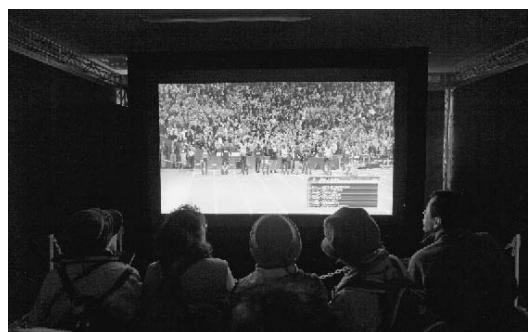


図17 85インチのスーパーハイビジョンシアター

④どーもくんセレブレーション

テレビ60年を記念した、プロジェクションマッピング（プロジェクターによる投影）を使った映像ショーを実施

- ・会期：2013年2月2日、3日
- ・会場：NHKホール前広場
- ・入場者数 5,950人（全体入場者数に含まれる）



図18 NHKホール前広場でのプロジェクトマッピング

⑤会場中継

- ・きょうからスタート！ テレビ60年感謝祭
(1月26日午前11:18～11:30、午後0:40～0:45、総合テレビ)

7. テレビ60年調査

テレビ放送開始60年を迎えるのを機に、テレビ視聴の変化の様相と60年たった現在のテレビの見方やテレビに対する意識を把握するために「テレビ60年調査」を実施した。

調査では、インターネットやデジタル録画機の普及などメディア環境が大きく変化したこの10年で特に見られるようになった2つの視聴スタイルを浮き彫りにする設計とした。1つ目はテレビを自分本位に見る視聴スタイルで、今回は“カスタマイズ視聴”と名付けた。2つ目は、人とのコミュニケーションの中でテレビを見るテレビ視聴で、これを“つながり視聴”と名付けた。

(1) “カスタマイズ視聴”～自分の見たいようにテレビ番組を見る

① “時間効率”を求めたタイムシフト視聴

日常的に（週に1日以上）テレビ番組をタイムシフト視聴する人は全体の40%で（図19）、その理由として「自分の都合のよいときに番組を見たい」が最も多く（81%）、以下「放送時間にしばられたくない」（38%）「時間を有効に使いたい」（37%）が続き、自分の都合に合わせて見る“時間効率”を重視していた（図20）。

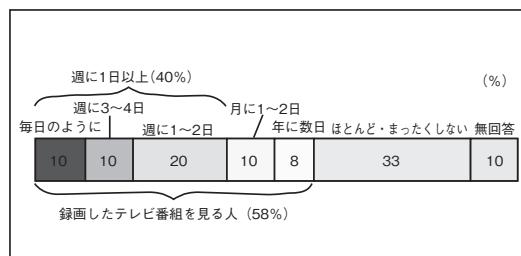


図19 録画番組の再生頻度

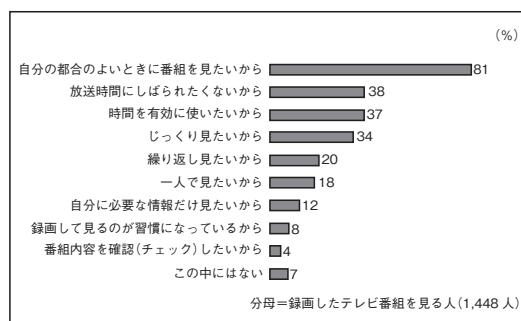


図20 録画して見る理由（複数回答）

②見たい番組を“検索”して見るテレビ番組動画

日常的に（週1回以上）インターネットでテレビ番組動画を見る人は全体の12%で（図21）、理由として「見逃した番組を見るため」が最も多く（46%）、「見たい番組を好きな時間に見られるから」（41%）「過去の番組を見るため」（40%）「検索して見られるから」（36%）が続き、“検索”機能で自分の見たい番組を容易に探せる利便性を重視していた（図22）。

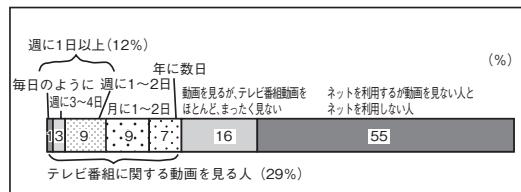


図21 テレビ番組に関する動画の視聴頻度

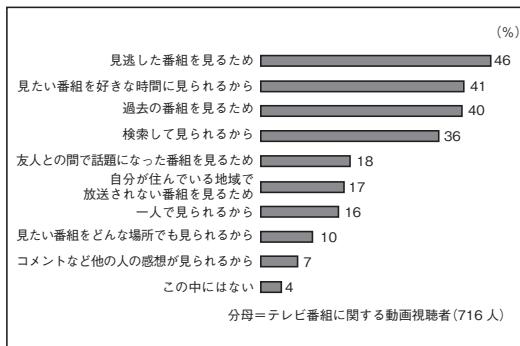


図22 テレビ番組動画の視聴理由（複数回答）

タイムシフト視聴とテレビ番組動画視聴のいずれかを日常的に行う“カスタマイズ視聴者”は、国民全体の45%に達している。インターネットのサービスの広がりやデジタル録画機の普及から、テレビを自分本位に見る“カスタマイズ視聴”が浸透しつつある。

(2) “つながり視聴”～コミュニケーションの中でのテレビ視聴～

①若者に広がる“テレビSNS”

SNS (LINE, Facebook, mixi, Twitterなど) でテレビに関する情報や感想を読み書きする行動（テレビSNS）は、全体の22%で（図23）、16～29歳では4割が日常的に行っており、テレビ番組を話題にコミュニケーションすること自体に楽しみを見出している人が多かった。理由としては「他の人の感想を知ることができるから」が83%（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人）で最も多かった。「同じ好みや趣味の人と情報や感想を共有できるから」（65%）や「面白い番組を知ることができるから」（65%）が続く。コミュニケーションの中で番組に関する情報を取得する理由が上位を占めていた（図24）。

若年層で、「自分の感想を他の人に伝えることができるから」「同じ好みや趣味の人と情報や感想を共有できるから」「みんなでテレビを見ている気がして楽しいから」が高かった。若年層では、テレビについてSNSで他の人が書いた内容を読むだけでなく、自ら発信することも積極的に行っていて、テレビ番組を話の種にコミュニケーションすること自体をテレビSNS利用の理由に挙げる人が多い傾向が見られた。

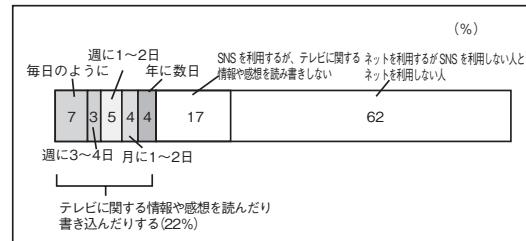


図23 テレビに関するSNSの利用頻度

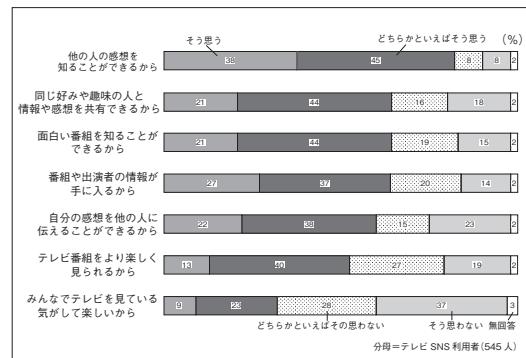


図24 テレビに関するSNSの利用理由

②家族視聴～家族コミュニケーションの中で重視されるテレビ～

テレビを家族と見ることが多い家族視聴派は、長期的に続いている減少傾向が止まり（図25）、「家族とテレビを見るときは、皆が楽しめる番組がいい」という人は83%、「家族そろって過ごすときはテレビをつけている」という人は73%で多数派となった（図26）。また、「自分は見たたくないテレビ番組でも、家族にあわせて見る」も59%で、多くの人が自分は見たくなくても家族と一緒にときはテレビをつけ、みんなが楽しめる番組を選択していた。「家族でテレビをきっかけに会話をする」は61%で、会話やコミュニケーションを楽しむツールとして、テレビを利用している人も多い。

こうした傾向は女40代以下で高く、女30・40代では、「皆が楽しめる番組がいい」が9割を超え、「家族にあわせて見る」が7割前後と高く、番組選択では、家族のことを優先する意識がうかがえた。また、「テレビをきっかけに会話をする」も女40代以下で7割以上と高く、テレビを家族の会話を促す手段として考えている意識もかいま見えた。

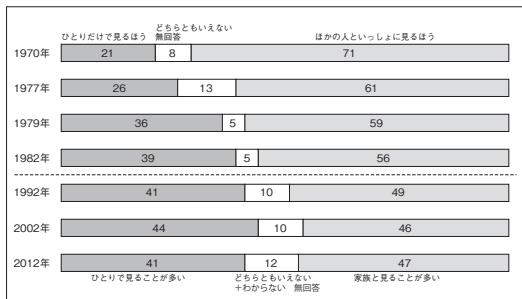


図25 個人視聴派と家族視聴派の推移

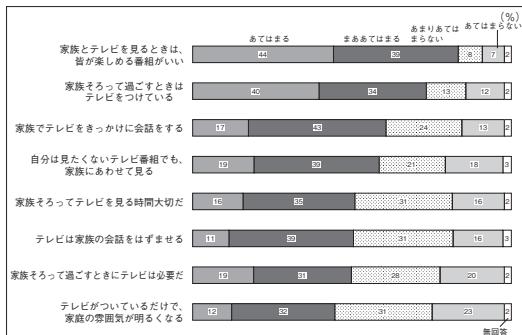


図26 家族視聴の意識

テレビSNSも家族視聴も、友人や家族とのコミュニケーションを楽しむツールとしてテレビを見ている“つながり視聴”といった共通の特徴が見出せる。

(3) 視聴者は“カスタマイズ視聴”と“つながり視聴”を両立

“カスタマイズ視聴”と“つながり視聴”的関係を見てみると、テレビSNS利用者の約7割が“カスタマイズ視聴”も行っていた。そして、家族視聴派と個人視聴派（ひとりで見ることが多い）で、“カスタマイズ視聴”をする人の割合に違いがあるかを見たところ、家族視聴派（67%）のほうが、個人視聴派（61%）より、“カスタマイズ視聴”をしていた。つまり“カスタマイズ視聴”と“つながり視聴”的関係性が強いことが分かった。

現代の視聴者は、“カスタマイズ視聴”と“つながり視聴”的2つの視聴スタイルを上手に使い分け、自由自在にテレビを楽しんでいると考えることができる。つまり、テレビ局から放送されるものをそのまま受け入れるのではなく、自分の生活に合わせてテレビライフを設計する、いわば、“自分流視聴”が、テレビ60年を迎えた現代の視聴者の姿と言えるであろう。

III. 未来に向けて

1. ハイブリッドキャスト

(1) 特徴

ハイブリッドキャストは、放送にインターネットを組み合わせ、双方から提供されるコンテンツを同時に利用できる新しい放送通信連携サービスである。放送が持つ高品質なコンテンツを確実に一斉同報する機能と、個々の視聴者のニーズに応えるインターネットの機能を組み合わせることで双方の利点を生かす。放送番組に関連したメタデータやコンテンツをインターネットから提供することで放送を強化・高度化し、放送事業者が持つ情報やコンテンツを効率的に提供する基盤を築くことを目指している。

ハイブリッドキャストは、新しいテレビ視聴スタイルにも対応できるよう、スマートフォンやタブレットなどの携帯端末をデジタルテレビと連携させることができる。これによって、携帯端末を関連情報の表示や使いやすい入力端末として利用できる。さらにインターネットからの情報がテレビ画面上に重なって表示されていても、緊急警報放送などの緊急情報が放送された場合には、放送を優先して確実に提示するなどの機能を備え、放送本来の安心・安全環境を確保する。また、放送以外の事業者でも、放送事業者との契約に基づきネットからの放送に関連したサービス提供が可能となるため、新たなビジネス機会構築への期待も高い。

NHKが行うハイブリッドキャストのサービスでは、現在、データ放送やNHKオンライン（ウェブページ）で提供しているコンテンツを活用しつつ、放送と連動したネットからの情報提供や関連するさまざまなネットコンテンツの利用につなげる。これによって、放送視聴の活性化やNHKオンデマンドの利用促進や、NHKのプレゼンスの強化を目指す。

(2) 基本的な仕組み

ハイブリッドキャスト実現のための技術仕様は、既存の地上デジタル／BSデジタルの放送方式に、最近のパソコンなどで使われ始めている次世代のウェブ技術であるHTML5を導入したものである。国際規格であるHTML5の仕様に、放送から提供される映像やEPGなどの諸情報を組み合わせるための独自機能を拡張している。

実際のサービスは、放送に含まれている信号の

ハイブリッドキャストの基本構造

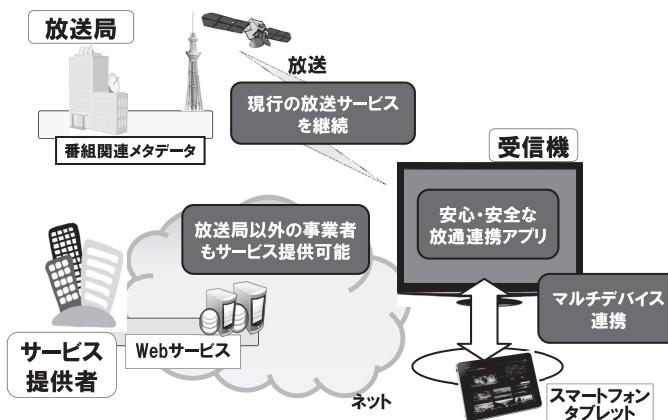


図27 ハイブリッドキャストの基本構造

指示に従って、インターネット経由で必要な情報やアプリケーションを取得し、そのアプリケーションをHTML5ブラウザ上で動作させることで実現する。これまでのBMLによるデータ放送よりも表現力が向上し、提供できる情報の多様化も図れる。またHTML5が広く一般で利用される技術であることから、さまざまなクリエイターによるアプリケーション開発も可能となる。このため、ハイブリッドキャストによって放送がより楽しく、より便利に視聴できるようになる。

(3) 各種実験の取り組み

ハイブリッドキャストは2010年からNHK放送技術研究所（技研）で研究開発を開始した。12年5月の技研公開では、国内の受信機メーカー5社の協力を得て開発したプロトタイプのハイブリッドキャスト受信機を展示した。旅番組、クイズ番組、語学番組による番組連動サービス、テレビとタブレット端末との連携サービス、スポーツ番組へのグラフィックデータ重畠サービス、緊急情報を視聴者に確実に伝える提示制御技術を実装し、民放テレビ局2社のサービス事例とともに紹介した。また、技研が開発したセットトップボックス型の試作受信機を用いて、ネットからの映像と放送からの映像を同時に表示させるマルチビューや手話CGなどの高精度同期技術、個人の趣向に応じた番組スポット自動差し替え技術、テレビとモバイル端末との認証連携技術を紹介し、ハイブリッドキャストの理解促進とともに早期実用化の可能性を内外の関係者に広く示した。

ハイブリッドキャストの実用化に向けて、フィ

ールドでの実証実験を実施した。12年7月末から8月中旬にかけて開催された夏季五輪ロンドン大会では、競泳、柔道、トライアスロンの各競技番組に対応したハイブリッドキャストアプリを開発し、大規模なサービスに対応可能なクラウドサーバーを用いて安定的に動作することを確認するとともに、実運用を想定したワークフローと効率的なアプリ制作環境を構築して、競技終了から中1日という短期間でアプリをリリースできることを示した。実験の様子は都内の展示会場において一般公開し、ハイブリッドキャストの魅力をアピールした。

12年11月には仙台市内で大規模災害発生を想定したハイブリッドキャストによる災害情報伝達に関する技術の実証実験を行った。これは、東北大学、NTTアイティ(株)、(財)NHKエンジニアリングサービスと共同で受託した、11年度第3次補正予算による総務省委託研究「災害情報を迅速に伝達するための放送・通信連携基盤技術の研究開発」の中で実施したものである。システム評価実験では、実験システムの総合動作試験と機能確認を行うとともに、東北在住的一般市民約130人を対象とした災害情報伝達に関するシミュレーションを行い、システムの受容性を評価した。東北大学で実施したデモンストレーションでは、地元の自治体や放送局、メーカー、マスコミ関係者ら約100人が参加し、災害発生時におけるハイブリッドキャストシステムの有用性を示した。本実験で得られた成果や知見は、ハイブリッドキャスト技術仕様と、その後のサービス展開の議論に反映させた。

(4) 受信機の実用化・普及に向けた各界の動き

放送事業者、受信機メーカー、通信事業者が共同で検討を進めてきたハイブリッドキャスト技術仕様が、13年3月29日に標準化機関であるIPTVフォーラムにおいて公開され、国内共通の技術規格が完成した。また、同様の事業者が参加している総務省の「放送サービス高度化に関する検討会」でも、放送通信連携サービスに関する検討が行われた。13年5月には、安心安全の確保やオープンな環境での実施として基本理念として提言される。さらに7月にはハイブリッドキャストに参入できる事業者認定のための環境も構築される。

これによってハイブリッドキャストのサービスを放送事業者が開始し、メーカーも受信機を商品化するための環境が整う。

受信機メーカーも具体的なハイブリッドキャスト対応テレビの商品化の検討を開始しており、13年度上半期中には、いくつかのメーカーから対応テレビ受信機が発売される可能性がある。14年になると対応受信機を発売するメーカーも増加する見通しであり、NHKとしてもコンテンツの充実との両輪で本格的な展開を目指していく。

民放各局も、新たなサービス開始に向けた検討を進めており、早い段階での参画が期待される。

(5) 実際のサービス内容と番組提案

編成局は、13年度中にハイブリッドキャスト対応仕様の受信機が発売されるという動きを受けて、年度内の実施を目指して「ハイブリッドキャスト提案」を募集した。関連団体を含めて全国から多数の提案が寄せられた。「d」ボタンを押せばいつでも楽しむことのできる「独立型サービス」として、最新のニュースをテレビ画面上に常時表示できるサービスやテレビ放送60年の歴史を彩るアーカイブス映像を約800本見ることのできるサービスなどを採択し制作する。

また、放送番組と一緒に進行する「連動型サービス」として、クイズ番組や情報番組、そしてスポーツ中継で、スマートフォンやタブレットと連携しながら楽しむ演出の番組などを制作する。

個別のコンテンツだけではなく、いつも使って頂くサービスとなるために、トップ画面も新たにレイアウトから開発、番組表もハイブリッドキャストならではの高い表現力のものを新規制作した。13年度は、「独立型」については年度前半から、「連動型」については年度後半をめどに連携番組やサービスを開始していく予定である。



図28 アーカイブス映像視聴アプリの試作例

(6) 将来展望

ハイブリッドキャストはアプリケーションの工夫でさまざまなサービスが実現できるなど、拡張

性に富んでいる。開始後も「育てていく」ことで、多彩なサービスの提供が可能となる。技術仕様も、より高度な機能の導入のための検討が進められる。

さらに、近年活発な検討が進められている次世代放送システムにおける超高精細映像技術4K/8K放送の検討においても、それが実現する時代のデータサービスや放送と連携したネット活用のために、ハイブリッドキャストの技術の活用が期待されている。今後は、より高機能な技術環境の整備とともに、超高精細での活用も視野に入れ、発展を目指していく。

2. スーパーハイビジョン

(1) 基本的な仕組み・サービス内容

スーパーハイビジョンは、ハイビジョンの16倍の画素数を持つ超高精細映像と22.2マルチチャンネルの3次元音響からなる次世代の放送メディアである。画素数を増やすことにより、画質を低下することなく視角を広げることが可能となり臨場感が向上する。また、単位視角あたりの画素数が多くなることにより実物感が向上する。垂直方向にも表現力のある3次元音響は音に包み込まれるような感覚を与える。このように、スーパーハイビジョンは、従来とは次元の異なる映像・音響体験を視聴者に提供することを目的としている。

(2) 研究開発の経過

スーパーハイビジョンの研究開発は、1995年に開始された超高精細映像の研究を端緒とする。02年に走査線4,000本級超高精細映像と22.2マルチチャンネル3次元音響を組み合わせたシステムとして一般に初めて公開された。その後、愛称をスーパーハイビジョンとし、基本仕様の策定とテレビジョン放送システムの構築に必要な技術開発に取り組んだ。

基本仕様の策定にあたっては、人間科学的な観点から、映像・音響の与える心理効果について研究を行った。その結果、臨場感や実物感の面から画素数は水平、垂直ともハイビジョンの4倍の $7,680 \times 4,320$ 、フレーム周波数は動き再現の面から120Hz、表色系については、色再現範囲の面から、従来のテレビと比して広色域の三原色とすることを定めた。音響については、垂直方向の表現力を持たせるために上下3層とし、各方向での音源定位と音による包み込まれ感の再現の面からチャンネル数を22とし、これに低音効果用に2チャネルを用い、22.2マルチチャンネル音響方式とした。

放送システムにおける各部分の技術開発については、800万画素素子を4枚用いて画素ずらしするカメラやプロジェクターの開発（02年）に引き続き、非圧縮信号の光ファイバー伝送による生中継伝送（05年）、東京～大阪間の圧縮信号のIP伝送（06年）、放送衛星による伝送（08年）、IP回線および衛星による国際伝送（08年）、フル解像度プロジェクター（09年）、フル解像度カメラ（10年）、小型プロジェクター、85型LCD（11年）、120Hzイメージセンサー、145型PDP、地上波伝送（12年）などの、実験、開発を行ってきた。これらの成果は、05年の愛・地球博や、06年以降、NABやIBC等の国内外の機器展等で展示してきた。

国際標準化にも取り組み、06年に、LSDI（大画面デジタル映像）の方式として、12年に、UHDTV（超高精細度テレビジョン）の方式として、ITU-R（国際電気通信連合無線通信部門）勧告となった。

（3）パブリックビューイングの実験内容

ロンドンオリンピックの期間中（12年7月27日～8月12日）、OBS（オリンピック放送機構）、BBC（英国放送協会）と共同で、スーパーハイビジョンによるパブリックビューイング（PV：Public Viewing、公開上映）を日本・イギリス・アメリカの9か所の会場で実施した。

この取り組みは、

- ①大画面の超高精細映像と3次元音響から成る、臨場感の高いスーパーハイビジョンの開発を加速し、公共放送として将来の放送メディアを先導すること
- ②海外放送機関と連携してスーパーハイビジョンを日本・イギリス・アメリカで同時に公開し、普及展開を促進させること
- ③IPネットワークを使った伝送技術の研究開発・検証

の3つを目的とした。

図29に全体系統の概要を示す。7競技（開会式・競泳・バスケットボール・陸上競技・自転車競技・シンクロナイズドスイミング・閉会式）のコンテンツを各競技会場で制作した（図30）。競技会場で制作したコンテンツをロンドン市内にあるBBCのTC0スタジオに仮設した制作・送出拠点に光回線を使って伝送した。生中継番組あるいは編集・パッケージ化した番組を、TS（Transport Stream）レート約280Mbpsに圧縮し、IPネットワークで日本・イギリス・アメリカのPV会場に伝送した。なお、オリンピックパークに設置され

たIBC（International Broadcasting Center）のPV会場にはBBCの送出拠点から非圧縮信号で番組を伝送し、世界各国の放送関係者に公開した。イギリスとアメリカのPV会場では、開会式と閉会式、競泳をライブで上映した。日本では、時差の関係から7月30日の午前中（現地時間）に行われた競泳をライブで上映した。

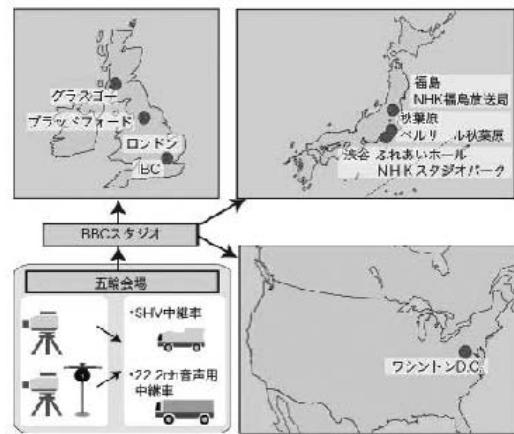


図29 スーパーハイビジョン ロンドンオリンピック パブリックビューイング系統図



図30 競技会場での撮影の様子



図31 パブリックビューイング会場での上映の様子（ふれあいホール）

(4) 外部状況

2Kは約200万の画素数を持ち、現行の地上・衛星デジタル放送でハイビジョン（HDTV）として用いられている。4Kフォーマットは2Kの縦横2倍の約800万の画素数（2Kの4倍の画質）を持ち、8Kフォーマット（スーパーハイビジョン）は2Kの縦横4倍の約3,300万の画素数（2Kの16倍の画質）を有している。

映画やゲームの分野では、一部のコンテンツがすでに4K化されており、映画館向けの業務用プロジェクターや撮影カメラなど4K機材が実用化されている。放送の受信機能はないものの、4Kディスプレーを搭載した家庭用テレビも発売が開始されている。市販のタブレットやPCの分野でも、2Kを超える画質が実現されており、市販のデジタルカメラにおいても、09年以降に発売された機種においてはほぼ100%の機器が4K相当以上の画素数を有しており、11年に出荷された機種では、1,600万画素（8K相当の約半分）以上の機器が1/4以上の割合となっている。

映画のデジタルシネマにおいては、07年以降4Kシステムが順次導入され、12年5月にはソニー・ピクチャーズが本格的な4K映画制作支援施設を開設した。

放送に関連する分野では、韓国のKBSが12年2月、地上波における4Kの実験放送局免許を申請し、7月末に免許が付与され、10月からKBSと民放3者が実験を開始した。米国のディレクTVや英国のBSkyBについても、4K放送に着手する動きが見られる。8Kについては、BBCとRAIがNHKと共同でスーパーハイビジョンの技術開発を行い、12年のロンドン五輪開催時に、NHKとBBC等が共同で、8K映像による伝送実験とパブリックビューイング（PV）を実施した。五輪PV時の視聴者アンケートによると、約56%が満足、約27%がやや満足と、8割以上の人人が臨場感や高画質に一定の評価をしている。

標準化については、ITU-Rにおいて、8K等の品質の映像について、放送で送受信する場合の映像フォーマットに関する国際標準勧告案が合意され、12年に正式に承認された。また、ITU-T・ISO/IECにおいて、次世代の圧縮方式（HEVC）の審議が行われ、13年1月、規格が承認された。

(5) 総務省での検討

総務省は12年11月、放送と通信を取り巻く環境の変化に対応し、高度な放送サービスの早期普及を図るために、「4K・8K（スーパーハイビジョン）」、「スマートテレビ」、「ケーブル・プラットフォーム」

の3分野について、その具体化に必要な事項を検討することを目的として「放送サービスの高度化に関する検討会」を設置した。その後、本検討会は13年2月、総務省が新たに設置した「ICT成長戦略会議」の下に置かれることとなった。

「4K・8K（スーパーハイビジョン）」の分野については、「スーパーハイビジョンWG」において検討が進められ、13年2月に以下の検討状況が報告された。最終報告は13年5月の予定である。

① 基本的な考え方

周辺状況として、4K技術実用化の進捗、標準化の進展、韓国等諸外国の4Kへの取り組みの動きがあり、国際競争力の観点から、日本の放送関連事業の強化を図るために、可能な限り早期にスーパーハイビジョンの放送サービスと受信機の普及を目指すことが不可欠で、そのためのロードマップを、12年度内を目途に策定し、認識を共有して取組みを加速することが必要。

② 伝送路・時間軸

当面の伝送路としてはCS124/128、ケーブルテレビやIPTV、CS110左旋などを活用し、衛星等において新たな空き周波数が確保される場合のサービス導入についても検討が必要。時間軸については、ワールドカップサッカー・ブラジル大会の開催年である14年に、関心を持つ視聴者が4Kを体験できる環境を整備し、リオ五輪開催年である16年に、関心を持つ視聴者が8Kを体験できる環境を整備し、五輪開催年である20年に、4K・8K双方の視聴が可能なテレビの普及を図ることを目標として進めていくことが考えられ、さらに、衛星については2K、4K、8Kのマイグレーション（移行）の在り方についても結論を得ていくことが必要。

③ 導入の主体

4K・8Kを世界に先駆けて早期に実現していくために、官民の関係者が協力して推進体制を整備し、放送主体として、放送事業者、受信機メーカー等関係事業者が参加する組織を新たに設立し、チャンネル運営に必要な技術、設備、コンテンツの確保を図ることを目指している。

(6) 推進体制と新法人設立

上記の放送サービスの高度化に関する検討に合わせ、総務省は12年度の補正予算として「次世代衛星放送テストベッド事業（31億円）」を要求し、13年3月に成立した。施策概要としては、「地デジ化による需要先食いで縮小したテレビ受信機の市場の回復や、欧米・韓国に後れない、高精細・高機能な端末・サービスの普及のためには、所要

の技術検証の後押し等を通じ、4K・8K、スマートテレビ等の実用化の前倒しが不可欠」であり、「新たに政策支援を講じ、技術検証のためのテストベッドを構築して、実用化に向けた作業を加速し、4K・8Kやスマートテレビの実用化を2年程度前倒しして、放送受信機の需要を大幅に拡大する」としており、NHK、民間放送事業者、受信機メーカー等による推進体制を整備し、次世代の圧縮方式(HEVC)等に対応した4K・8K放送の放送運用規格の動作実証などの実証業務を委託することを想定している。

上記と時期を合わせる形で、4K・8Kを早期に実現していくために、「オールジャパン」の推進体制である一般社団法人「次世代放送推進フォーラム」が13年5月に設立される見込みである。法人の目的は、4K・8K、スマートテレビ等の次世代放送サービスを早期に実現するために、送信・受信に関する規定や仕様の検討、実証、及び試行的な放送等を行い、放送サービスの高度化を促進し、利用者の利便性の向上に寄与することであり、次世代放送サービスに関する技術仕様の検討、検証、評価、実用化に向けた実証・試行的な放送、サービスの開発、普及、利用促進、周知広報などの事業を行っていく予定である。

(7) NHKでの検討状況

総務省の検討会や新法人の設立に連動する形で、NHKでもスーパーハイビジョンに関する検討が行われている。必要となる機材の開発整備の検討を行う設備グループ、必要となる規格や運用規定の検討を行う標準化グループ、大規模なスポーツイベントの検討を行う大型スポーツグループ、スーパーハイビジョンのコンテンツ制作を検討するコンテンツ制作グループを中心に、部局横断的に検討を進めている。

3. 放送文化アーカイブ構想

放送文化研究所では、テレビ放送開始60年を機に、放送番組の映像・音声以外にNHK内で蓄積してきた放送関連資料を格納するデジタル・アーカイブ(=放送文化アーカイブ)を構築する構想を立ち上げた。この構想は、NHKの持つ放送関連資料、研究・調査関係の資料等を、研究や教育に利活用しやすくするとともに、知財として放送現場や経営にも役立てるようにすることを目的としている。

背景には、デジタル・アーカイブ技術によって、図書館や博物館、美術館、大学、そしてメディア産業等が所有・蓄積している知的資源・文化的資

源の統合・活用を推進しようとするMLA連携(=Museum, Library, Archive相互のデータ連携)が世界的な潮流となり、放送界でもイギリスの公共放送BBCのように積極的に対応する動きが生まれていることがある。

12年度は、この放送文化アーカイブを構築していくにあたって、その可能性や機能等を検証するためにデモサイトを構築した。構築にあたっては、アーカイブや情報処理の先進的研究機関である国立情報学研究所の協力を得て、共同研究の形で進めた。

(1) コンテンツ

このアーカイブに格納するコンテンツは、NHKアーカイブで収集・保存している放送番組の映像・音声以外の各種の放送関連資料である。デモサイトではさしあたり、放送文化研究所から出されている刊行物を中心的なコンテンツとした。

『放送研究と調査』『年報』などに所収の論文や、世論調査の結果データ、『NHK年鑑』や『20世紀放送史』などの書籍である。また、放送関係者のオーラルヒストリー資料(口述資料)やNHKの番組に関連するメタデータなども一部入っている。さらに外部の主要な図書館の書籍情報や出版情報などもデータ連携の形で検索対象となっている。

(2) 主な機能

放送文化アーカイブ(デモサイト)の特徴は、種類の異なるNHK内外のデータ、コンテンツを統合的に検索することができるところである。これは上記の国立情報学研究所が開発した独自の検索エンジンである「連想検索」という検索技術を使うことによって可能となっている。例えば、「受信料」という検索語を入力すると、論文や世論調査データ、書籍、経営関連資料、口述資料、外部の書籍、資料情報などの中から「受信料」に関わる情報や資料を一括して検索することができる。

また、独自のデジタル放送史年表の機能もある。これはNHKが作成した約2万項目の大規模な放送史・メディア史関連年表をデジタルデータとして用いており、検索語を入力すると関連の記述を検索したり、そこから関連の資料を探したりすることができるようになっている。

放送関係者のオーラルヒストリー資料を検索する機能もある。デモサイトには、約140人分を収録し、検索語を入れると、その語および関連語を証言の中で発している人を検索して表示し、さらにその該当箇所や証言内での出現回数などを表示

させることが可能となっている。オーラルヒストリー資料は、音声として収集されたものであることから、テキストデータ化されていないケースが多く、検索するなどして利活用することが困難であった。放送文化アーカイブのこの機能によって、オーラルヒストリー研究が大きく進展する可能性がある。

(3) スケジュール

今後は、今回構築したデモサイトを使って、本サイトの企画・構築に向け、コンテンツ、機能、インターフェイス、デザイン、運用体制、技術などの各点について検証・評価を行い、NHKの内部インターネットでの利用や、一般向けの公開サイトの企画・構築を目指していく計画である。

4. 番組eテキストシステムの構築

(1) システムの概要

放送文化研究所では12年度、「テレビ60年プロジェクト」の一環として「番組eテキストシステム」と呼ぶ、アーカイブ番組の大学講義向け配信・視聴システムを開発した。これは、①NHKアーカイブスにある膨大な番組ストックから、特定のテーマに則って数本～数十本の番組を選び出し、②権利処理を行って、③特設のウェブサイトにアップし、④IDを配付した大学の講師と受講生にネット配信するものである。この具体的な実践として、NHKアーカイブスから沖縄現代史に関連する番組31本を選び出し、権利処理を行って、特設サイト「NHKアーカイブスで学ぶ沖縄現代史」にアップし、12年度後期に早稲田大学教育学部で行われた半年間15回の授業に連動して31本をストリーミング配信した。

これまで放送文化研究所では、独自に、あるいは大学との共同研究等の形で、アーカイブ番組を視聴・分析し、番組に描かれたさまざまな事象、時代を研究する取り組みを行ってきた。今回の試みは、こうした番組研究、事象研究のアプローチで選び出したアーカイブ番組を、研究者だけの利用にとどめず、広く大学教育の場に供するため、ネットによる大学向け番組配信という形で具体化したものである。大学の学部で開かれる半年の講座の主テキストとしてアーカイブ番組を使用した時、どのような講義が生まれ、どのような教育効果が得られるかを検証しようとするものであった。

(2) 大学講義への展開

以下に示すのは、早稲田大学で行われた全15回の講義の標題と、特設サイト「NHKアーカイブ

スで学ぶ沖縄現代史」にアップされた計31本の番組のうち講師が特に重視して、学生が受講前に視聴することを義務付けた14本の番組である。

回	講義標題	使用番組
1	アーカイブ活用	『ETV特集』「テレビが見つめた沖縄～アーカイブ映像からたどる本土復帰40年」(2012, 89分)
2	沖縄現代史総論	『長老の風車 山田政心と150人の一族』(1984, 44分)
3	沖縄戦の記憶（1）	『特集ドキュメンタリー』「沖縄の歎」(1969, 59分)
4	沖縄戦の記憶（2）	『NHKスペシャル』「沖縄 よみがえる戦場～読谷村民2,500人が語る地上戦」(2005, 52分)
5	復帰運動からみる基地問題	『現代の映像』「沖縄全軍労」(1970, 29分)
6	くらしの中からみる基地問題	『NHKスペシャル』「安保と基地の間で 第1回 基地に一番近い学校～卒業生4800人のいま」(2000, 49分)
7	沖縄返還と密約（1）	『ドキュメンタリー 本土復帰』(1971, 29分)
8	沖縄返還と密約（2）	『NHKスペシャル』「密使・若泉敬～沖縄返還の代償」(2010, 54分)
9	沖縄の経済	『ルポルタージュにっぽん』「軍用地売ります～沖縄・1982年春」(1982, 29分)
10	沖縄とアイデンティティ（1）	『ぐるっと海道3万キロ』「涙で書いたラブレター」(1987, 29分)
11	沖縄とアイデンティティ（2）	『HVスペシャル』「美ら島賛歌～『あたらしい沖縄のうた』を訪ねて」(2002, 120分)
12	沖縄の文化（1）	『NHK特集』「わが沖縄～具志堅用高とその一族」(1979, 49分)
13	沖縄の文化（2）	『イザイホー～沖縄の神女たち』(1979, 45分)
14	沖縄の文化（3）	『ETVスペシャル』「猿さんを知っていますか？～沖縄で生まれ大和に生きた詩人・山之口猿の軌跡」(2004, 90分)
15	ミニシンポジウム	なし

使用番組31本はすべてドキュメンタリーであった。放送年代別の内訳は50年代2本、60年代4本、70年代7本、80年代7本、90年代2本、00年代7本、10年代2本であった。ドキュメンタリー映像の持つ、独特の喚起力は放送年代を超えて、受講生に大きなインパクトを与えたようであり、13年3月に行われた放送文化研究所のワークショップではこの点を中心に報告を行った。

なお講座開講中、各回の講義のねらいと番組の使用意図を「講義録」という形で講師から、学生からは感想文を毎回、講義の前後に提出してもらった。「番組eテキストシステム」の教育効果を検証するため、こうした資料の蓄積と分析を進めた。